様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2019
課題番号：１８Ｋ１２１８８

研究課題名（和文）人新世の環境思想　ポスト・デカルト的一元論の批判的検討

研究課題名（英文）Environmental Thought in the Anthropocene: Critical Examination of the Post-Cartesian Monism

研究代表者
齋藤　幸平（Saito, Kohei）

大阪市立大学・大学院経済学研究科・准教授

研究者番号：８０８０３６８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、カール・マルクスのエコロジカルな資本主義批判の方法論が、「存在論的一元論」と「方法論的（分析的）二元論」を採用していることが明らかとなった。近年マルクスは「社会」と「自然」のデカルト的「存在論的二元論」を採用していると批判されてきたが、それは誤っていることが示された。さらに、「方法論的二元論」を採用することで、資本主義の歴史的特殊性を把握することができる。その点において、マルクスの理論的枠組みは、ハイブリッドを掲げる論者たちが採用する「存在論的一元論」と「方法論的一元論」のペアよりも優れていることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
気候危機の深刻化は、資本主義との関連で論じられる必要性がある。その際の理論的参照点としてカール・マルクスの『資本論』が役に立つ可能性がある。ところが、近年、マルクスの理論的枠組みは、「社会」と「自然」を対立させる二元論に落ちってしまっていて、人間と自然の絡み合いが複雑化した「人新世」の環境危機を論じることはできないと批判されてきた。マルクスの理論を丁寧に再検討することで、そのような批判が的外れであり、さらには、批判者たちの一元論的代替案よりも優れていることを示した。

研究成果の概要（英文）：This project revealed that Marx's ecological critique of capitalism is founded on "ontological monism" and "methodological dualism". In recent years, Marx has been accused of his Cartesian "ontological dualism" of Society and Nature, but such accusations has no validity. Furthermore, "methodological dualism" is capable of comprehending the historical specificity of the capitalist mode of production. Precisely in this sense, Marx's theoretical framework turns out superior to the pair of "ontological monism" and "methodological monism" that is increasingly popular due to Bruno Latour and Jason W. Moore.

研究分野：経済思想

キーワード：人新世　マルクス　物質代謝　MEGA　環境危機　資本主義　コミュニズム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

オゾンホールの研究でノーベル化学賞を受賞したパウル・クルッツェンが新しい地質学上の時代区分として「人新世」（Anthropocene）と呼ばれる地質学的時代区分が提唱されてから、すでに 20 年近くが経つ。だが、この間、気候変動、海洋酸性化、砂漠化、生態系の多様性の喪失といったグローバルな環境危機はますます深刻さを増し、文明の存続さえも脅かすような深刻な危機を引き起こすようになっている。

もちろん、無限の経済成長を求める資本主義システムがグローバルな環境危機に大きく影響していることは間違いない。そのため、資本主義批判としてのカール・マルクスの思想が再注目を集めるようになっているのは、偶然ではない。というのも、近年の研究によって、マルクスの経済学批判のうちに、エコロジカルな要素が存在することが明らかにされるようになったからである。

ところが、人類の自然に対する影響力が増大するなかで、アクター・ネットワーク論、世界エコロジー論、思弁的実在論を中心に、マルクスの経済学批判が「デカルト的二元論」であるとして、批判されるようになっている。それに対して、人間と自然を両者の「ハイブリッド」として一元論的に捉える哲学的な把握が主流になりつつあるのである。

この一元論と二元論の対立を批判的吟味し、人新世の思想を展開し、人新世の環境倫理が進むべき方向性を提示しようとしたのである。

２．研究の目的

本研究は、マルクスの理論的枠組みが、「デカルト的二元論」に陥っていないことを示そうとした。そのうえで、なぜマルクスの存在論と方法論が、マルクスの批判者たちよりも優れているかを説明することを目的としていた。

その際には、マルクスの二元論的な把握が現代の環境危機を分析すうｒために、依然として有効性を持つことを証明し、マルクス自身も、自然科学と人文学、社会科学の垣根を超えたエコロジーをめぐる対話を通じて、より平等で、民主主義的で、持続可能な社会的生産に向けた展望を構想していたことを説得力ある形で論証しようと試みた。

それと比較すると、ブルーノ・ラトゥールを擁するブレークスルー・インスティチュートに代表される「偉大なる人新世」を目指す一元論は、一見ラディカルな理論的な装いにもかかわらず、環境思想が繰り返し批判してきたはずの近代主義、技術至上主義へと後退してしまっていることが、その理論的限界として批判されなくてはならない。

とりわけ、ジェイソン・Ｗ・ムーアのマルクス主義の装いをした一元論が持つ危険性を指摘しようとした。

３．研究の方法

（１）現在ドイツで刊行中の『新マルクス・エンゲルス全集（ＭＥＧＡ）』で新たに刊行されつつある晩期マルクスの自然科学ノートを分析する。それによって、マルクスの経済的形態規定論の中核をなす「純粋に社会的なもの」と自然の関係性を明らかにし、社会と自然の分離は、産業革命後に生じた地球環境の変化の経済的、政治的、文化的分析にとって、不可欠な理論的前提であることを明らかにする。

（２）ジェイソン・Ｗ・ムーア、ニック・スルニチェク、アーロン・バスターニといった現代のマルクス主義者のテクストの批判的検討を通じて、現在主流になりつつある一元論や生産力至上主義が、かれらのポスト資本主義社会の構想に、どのような影響を及ぼしているかを考察する。その際には、ブルーノ・ラトゥールやダナ・ハラウェイといった現代思想の論者が与えている影響を批判的に検討する。

４．研究成果

（１）マルクスの物質代謝論は、人間と自然の絶えざる相互関係を扱っており、『資本論』においても繰り返し、人間は自然の一部であるということを強調している。マルクスの唯物論の基本的洞察は、人間と自然は同じ次元にあり、素材的には同一であることである。ここには「存在論的一元論」を見て取ることができる。ところが、そのような存在論的一元論は歪曲されて、ジェイソン・Ｗ・ムーアらによって、あたかも、マルクスは「デカルト的二元論」に陥っているかのように、批判されてきたのだった。このデカルト的二元論は、デカルトの「心」と「身体」の議論からもわかるように、二つを完全に切り離すものである。つまり、両者の存在論的な位相が異なることに依拠した「存在論的二元論」である。この批判が正しければ、マルクスは「社会」と「自然」を完全に分離していたことになる。だが、マルクスの物質代謝論は、まさに社会が自然の一部として、絶えざる相互作用のうちにあることを指摘するものであり、ムーアの批判は全く当たらないことが示された。

（２）ムーアが誤解しているのは、マルクスの形態規定論である。確かに、マルクスは「純粋に社会的なもの」の次元を、価値形態論などで分離して、分析している。だが、これは「存在論的二元論」ではなく、「方法論的二元論」である。つまり、資本主義の特殊性を認識するために、ひとまず分析的に「純粋に社会的なもの」と「自然的なもの」を分離する必要がある。この分析

的分離が、マルクスの唯物論を「史的」唯物論にしている。そうしなければ、『現代思想』２０２０年１月号での対談でも明らかになったように、地震や火山のような人間の干渉なしにも生じる自然災害と、人間の影響による気候変動による台風や高潮のような「自然災害」を区別することができなくなり、粗野な唯物論に陥ってしまう。

（３）マルクスは、分析的に「社会的なもの」と「自然的なもの」を分離していたが、最終的には、両者が現実の資本蓄積過程において、具体的にどのように絡み合うかを分析しようとしていた。そのため、とくに晩年のマルクスは、自然科学の研究を熱心に行っていたのである。実際、マルクスの自然科学についてのノートを丁寧に分析することで、両者の絡み合いから生じる矛盾が「物質代謝の亀裂」を生むことがわかる。その成果を『マルクス・エンゲルス全集』第四部門第一八巻として刊行するとともに、分析を『大洪水の前に―マルクスと惑星の物質代謝』（堀之内出版、二〇一九年）で発表した。

（４）その理論的重要性にもかかわらず、マルクスの物質代謝論の重要性はしばしば見逃されてきた。その後のマルクス主義は生産力至上主義に陥った結果、マルクスのエコロジカルな資本主義批判には十分な注意を払ってこなかったのである。今回の研究の大きな発見の一つは、ルカーチが、マルクスの問題意識を正しくつかんでいたことが判明したことである。これまでルカーチは、社会と自然を分離し、弁証法的分析を社会の次元のみに限定して行ってきたとされてきた。これは「デカルト的二元論」に近い。ところが、一九二〇年代の生前未刊行の草稿 *Chvotismus und die Dialektik* を丁寧に読むと、「物質代謝」の概念を用いて、社会と自然の関係性を、マルクスと同じような形で論じ、純粋に社会的なものがもたらす矛盾の顕在化を「危機＝恐慌」として論じていたことが判明するのである。しかも、このルカーチの洞察は最晩年の未完の草稿まで続いており、ルカーチの理論を包括的に理解するために、今後必要不可欠な参照点になるはずである。この論文は、ドイッチャー記念賞の受賞講演としてロンドンで発表したが、二〇二〇年には、ドイツ文学のトップジャーナルである *New German Critique* において刊行される予定である。

（５）ところが、こうしたマルクス主義エコロジーをめぐる議論は、現代の気候危機に言及するマルクス主義者たちの議論においてさえ、十分に反映されていない。そのため、ニック・スルニチェクや、ポール・メイソン、アーロン・バスターニのようなマルクス主義者たちは、しばしば「生産力至上主義」に陥ってしまう。例えば、ジェイソン・W・ムーアは、ブレイクスルーインスティトゥートに肯定的に言及しているが、このアメリカのシンクタンクは、ジオエンジニアリングや原子力発電によって気候変動を乗り越えようとする「エコ近代主義」のシンクタンクである。一元論の危険性は、人間と自然の区別を取っ払ってしまうことで、さらなる人間の自然への介入を正当化してしまうことにある。このようなスチュワードシップの思想が、マルクス主義の「加速主義」に取り込まれることで、自然的制約を認めないプロメテウス主義に転化する。ところが、そのような形で展開される「潤沢な経済」は、資本主義の価値観を内面化してしまっており、最終的には、資本主義を克服することができないことが明らかにされた。

（６）加速主義へのオルタナティブとして、『未来への大分岐　資本主義の終わりか、人類の終焉か』（集英社新書）においては、マイケル・ハートの提唱する〈コモン〉という代替案がもつ可能性を追求した。水平的で、民主的な自治管理を通じて、社会的生産を組織することが、「コミュニズム」の実践的課題として定式化されることで、原子力発電やジオエンジニアリングのような「閉鎖的技術」ではなく、人々に開かれた「開放的技術」を発展させるというアンドレ・ゴルツの主張の重要性が明らかになった（cf. 「気候危機と環境革命」『現代思想』2020 年 3 月号）。

（７）一般向けに『世界』や『群像』といった文芸誌への寄稿を通じて、気候変動に挑む世界の潮流を紹介した。マルクスの議論をベースに、「未来のための金曜日」や「サンライズ・ムーヴメント」、「絶滅への叛逆」といった若者の運動が、資本主義システムそのものを乗り越える「環境革命」を志向するようになっていることの実践的意義を明らかにした。

（８）最終的には、これらの議論をより包括的に発展させ、単著にまとめていく。この二年ほどで執筆したものを中心にして、Cambridge University Press と契約を結ぶことができ、Marx in the Anthropocene として、二〇二〇年中に原稿を完成させ、二〇二一年には刊行される予定である。

（９）2018 年にドイッチャー記念賞を受賞したことによって、さまざまな国から招待講演の依

頼が来るようになった。その結果、この二年間にさらなる国際的ネットワークを構築することができた。具体的な成果としては、例えば、Palgrave 社のシリーズ Marx, Engels, and Marxisms のアシスタントエディターに就任したり、韓国の Social Science of Korea の国際研究プロジェクトに参加することになった。今後、（８）で言及した英語の単著を CUP から刊行することで、より一層多くの研究者や活動家たちに届くようなマルクス解釈を展開していきたいと思っている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 斎藤幸平	４．巻 60
２．論文標題 「ソ連崩壊後におけるマルクスのエコロジーの「再発見」」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『唯物論と現代』	６．最初と最後の頁 63-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 斎藤幸平	４．巻 28.2
２．論文標題 Marx’s Theory of Metabolism in the Age of Global Ecological Crisis	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Historical Materialism	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 斎藤幸平	４．巻 48.5
２．論文標題 「気候危機と環境革命　気候ケインズ主義、加速主義、エコ社会主義」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『現代思想』	６．最初と最後の頁 173-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　10件／うち国際学会　6件）

１．発表者名 斎藤幸平
２．発表標題 The unfinished system of Karl Marx: Critically reading Capital as a challenge for our time
３．学会等名 Marx200 Rosa Luxemburg Stiftung（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 斎藤幸平
２．発表標題 Marx and Engels:The Intellectual Relationship Revisited from an Ecological Perspective
３．学会等名 Karl Marx; Life, Ideas, Influence: A Critical Examination on the Bicentenary（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 斎藤幸平
２．発表標題 Marx's Critique of Global Ecological Crisis: What Can We Learn from His Unpublished Notebooks?
３．学会等名 The 1st International Young Scholars Forum of Marxism（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 斎藤幸平
２．発表標題 The Rediscovery of Marx's Ecology and the New Ecological Critique of Political Economy
３．学会等名 Marx's Social Thoughts and Capitalism in East Asia（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 斎藤幸平
２．発表標題 Karl Marx’s Ecosocialism in his Ecological Notebooks
３．学会等名 LRC Speaker Series（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 斎藤幸平
２．発表標題 Lukacs' Theory of Metabolism as a Foundation of Ecosocialist Realism
３．学会等名 Historical Materialism（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 斎藤幸平
２．発表標題 Marx’s Idea of Ecosocialism in the Anthropocene
３．学会等名 Economy of Socialist Eco-Civilization（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 斎藤幸平
２．発表標題 Marx, MEGA, Lukacs’ und nun?
３．学会等名 Nature Technology Metaphysics（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 斎藤幸平
２．発表標題 Climate Justice and Class Struggle: Ecosocialism beyond Metabolic Rifts and the Imperial Mode of Living
３．学会等名 Marx 201. Ripensare l’alternativa（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 斎藤幸平
２．発表標題 Die Aktualitaet der Marx‘schen Idee des Oeko-Sozialismus im Anthropozaen
３．学会等名 Globale Herausforderungen - Antworten auf den Klimawandel（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計7件

１．著者名 斎藤幸平	４．発行年 2019年
２．出版社 堀之内出版	５．総ページ数 352
３．書名 『大洪水の前に　マルクスと惑星の物質代謝』	

１．著者名 Bellofiore, Riccardo, Moseley, Fred, Wolf, Frieder Otto, Bischoff, Joachim, Saito, Kohei, Daremas, Georgios, Toporowski, Jan, Dellheim, Judith, Bond, Patrick, Brie, Michael	４．発行年 2018年
２．出版社 Palgrave	５．総ページ数 368
３．書名 The Unfinished System of Karl Marx	

１．著者名 マルクス・ガブリエル、マイケル・ハート、ポール・メイソン、斎藤 幸平	４．発行年 2019年
２．出版社 集英社	５．総ページ数 352
３．書名 未来への大分岐 資本主義の終わりか、人間の終焉か?	

1．著者名 Teinosuke Otani, Kohei Saito, and Timm Grassmann (ed.)	4．発行年 2019年
2．出版社 De Gruyter	5．総ページ数 1294
3．書名 Marx-Engels-Gesamtausgabe, vierte Abteilung, Band 18	

1．著者名 Marcello Musto, Bob Jessop, Leo Panitch, Kevin Anderson, John Bellamy Foster, Silvia Federici, Kohei Saito, Etienne Balibar	4．発行年 2019年
2．出版社 Routledge	5．総ページ数 312
3．書名 Marx's Capital after 150 Years: Critique and Alternative to Capitalism	

1．著者名 Marcello Musto, Shaibal Gupta, Babak Amini, Kohei Saito, Miguel Vedda, Michael Brie, Peter Hudis	4．発行年 2019年
2．出版社 Palgrave	5．総ページ数 378
3．書名 Karl Marx’s Life, Ideas, and Influences: A Critical Examination on the Bicentenary	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考